2019（平成 31・令和元）年度　格闘技観戦同好会　第 8 回観戦　　9.6（金）

伝統のインター・タッグをめぐる抗争

- 全日本プロレス -

1986（昭和 61）年 1 月～ 2 月、1987（昭和 62）年 1 月～ 2 月、全日本プロレスは日本プロレスから受け継いだ日本マット界における伝統のＮＷＡ認可ＰＷＦ認定インター・ナショナル・タッグ選手権（以下、インター・タッグ）王座をめぐる全日本プロレスとジャパン・プロレスの抗争が繰り広げられた。

ジャパン・プロレスは長州力率いる旧・新日本プロレスの維新軍を中心とする。1985（昭和 60）年に全日本プロレスへ移籍していた。

① 1986（昭和 61）年 1 月 28 日　東京・東京体育館
（ＮＷＡ認可ＰＷＦ認定インター・ナショナル・タッグ選手権）
ジャンボ鶴田／天龍源一郎　VS　長州力／谷津嘉章

このタイトル・マッチを前に、軍団抗争から一歩引いていた鶴田が長州に牙をむき、脇腹を徹底的に痛め付けていた。そのため長州は脇腹にテーピングを施してタイトル挑戦となる。鶴田・天龍（以下、鶴龍）はもちろん容赦無く長州の負傷箇所を徹底攻撃をする。前半は長州・谷津のツープラトン攻撃で試合のペースを握るも、ダメージが蓄積していく長州が下がって谷津が孤軍奮闘となってしまう。リング下で胴をテーピングでぐるぐる巻きにした長州は珍しくドロップ・キックを鶴田に打ち込むも、すぐに反撃を喰らってしまう。4 人の中で“格下”と認識されていた谷津が長州の分も背負って鶴龍に果敢に挑んでいく。ジャパン勢が 1 年以上全日マットを主戦場にしたことにより、“古き良き時代のアメリカン・プロレス”（スローな展開が主流）が、長州たちのハイスパート・レスリングに適応して、そこに団体対抗の要素も上乗せされ、緊張感に満ちた試合が成立した。長州も全日参戦 1 年目は感情が先行して反則やリング・アウトなど不完全燃焼が多かったが、この頃からタッグ戦においては決着をつけることを意識していたようである。

② 1986（昭和 61）年 2 月 5 日　北海道・札幌中島体育センター
（ＮＷＡ認可ＰＷＦ認定インター・ナショナル・タッグ選手権）
ジャンボ鶴田／天龍源一郎　VS　長州力／谷津嘉章

ジャパン軍としては連敗は許されない。長州の脇腹負傷は癒えぬまま、背水の陣でタッグ王座を賭けたリベンジ・マッチに臨む。長州は最初から胴をテーピングでガードし、谷津は東京でのフォール負けを払拭するため、鶴龍に物怖じすることなく攻め込んでいく。

終盤、天龍がロープ際の谷津に突進したところ、谷津は身をかわして天龍のバックにまわってジャーマン・スープレックスの態勢へ。トップ・ロープを掴んで抵抗する天龍に、

レフリーのブラインドを突きエプロンを走ってきた長州がラリアート。当たりは不充分だが、棒立ちになった天龍を谷津の高角度ジャーマン・スープレックス・ホールドがとらえる。カウント 3 が入った瞬間、ジャパン勢のセコンド陣がリング内になだれ込む。谷津は当然だが、長州も嬉しそうな笑顔を見せたのが印象的であった。

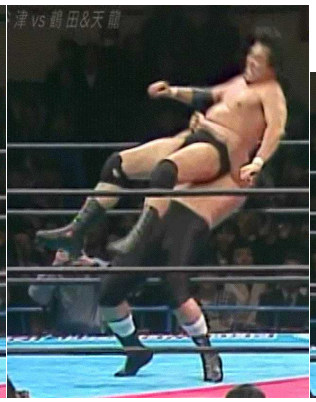
③ 1987（昭和 62）年 1 月 24 日　神奈川・横浜文化体育館
（ＮＷＡ認可ＰＷＦ認定インター・ナショナル・タッグ選手権）
長州力／谷津嘉章　VS　ジャンボ鶴田／天龍源一郎

長州・谷津組はほぼ 1 年、タッグ・タイトルを防衛してきた。しかし 1986 年末の最強タッグ決定リーグ戦は鶴龍に優勝をかっさらわれてしまった。また 1 年前とは違って長州は怪我をしていない。ほぼ万全な状態で 4 選手がタイトル・マッチに臨んだ。

問題はフィニッシュの場面。解説のジャイアント馬場さんも難じていたが、レフリーのタイガー服部が、立ち位置に苦慮して、天龍が長州をロープに振った際に両者の間に割って入った。天龍は不用意にも服部の行動に注意を取られてしまい、そこにフル・スイングのリキ・ラリアート。長州の全日本プロレス参戦期間のなかでトップ 5 に入る程のクリーン・ヒットであった。文句なしのカウント 3 をとったものの、少々きな臭さが残る試合でもあった。しかしながら、タイトル・マッチ連戦の初戦をクリアしただけなので、王者チームは気を引き締めて札幌決戦へ向かって行く。

② 1986（昭和 61）年 2 月 5 日　北海道・札幌中島体育センター
（ＮＷＡ認可ＰＷＦ認定インター・ナショナル・タッグ選手権）
長州力／谷津嘉章　VS　ジャンボ鶴田／天龍源一郎

ジャパン軍は連勝したいし、全日軍は団体の看板タイトルを何としても奪還したい。両軍一歩も譲らぬ意地の張り合いを見せる。2 年にわたるタッグ連戦により、谷津の株（評価）が急上昇した。また谷津自身も気力・体調が充実している様子が試合に出ている。例えば得意技でフィニッシュのジャーマンスープレックス。調腰高、ブリッジを効かせた投げで、日本人でも重量級の鶴田が高角度で投げきられている。



鶴龍、特に天龍が何としても自分の力でフォールをとってベルトを取り返したいという意欲が無骨な技のひとつひとつに現れている。谷津をパワー・ボムで叩き付けるも、長州のラリアートでカウント 3 ならず。勢いでリング下に落ちていく長州を鶴田が追いかける。天龍は谷津のバックにまわり、驚きの報復ジャーマン・スープレックス・ホールド。

「純粋な意地」から見よう見まねのジャーマン。身体が硬すぎてブリッジが効かず、さらに疲れているところを力尽くで“やってみた”なので、兎に角不格好なのだが、谷津の「やられたっ」という表情が、このフィニッシュのすべてである。勝利者インタビューに応える天龍は頗る機嫌がよろしい。